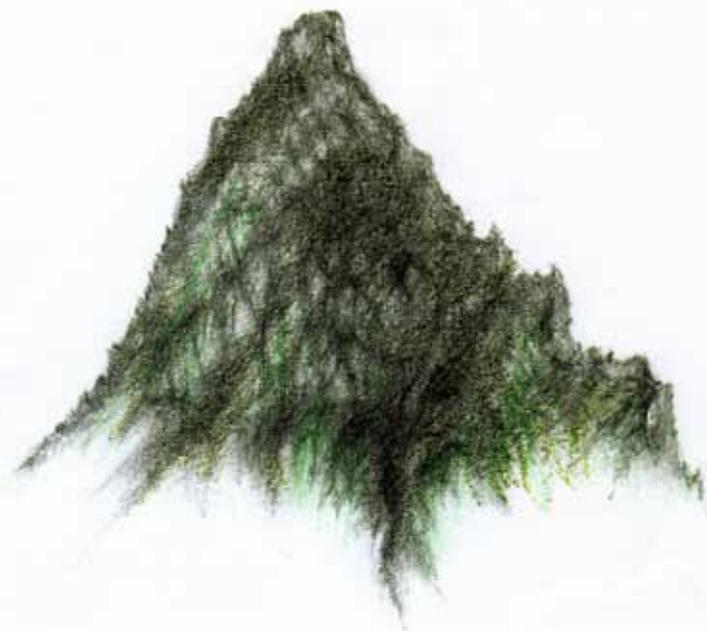


あそ 11

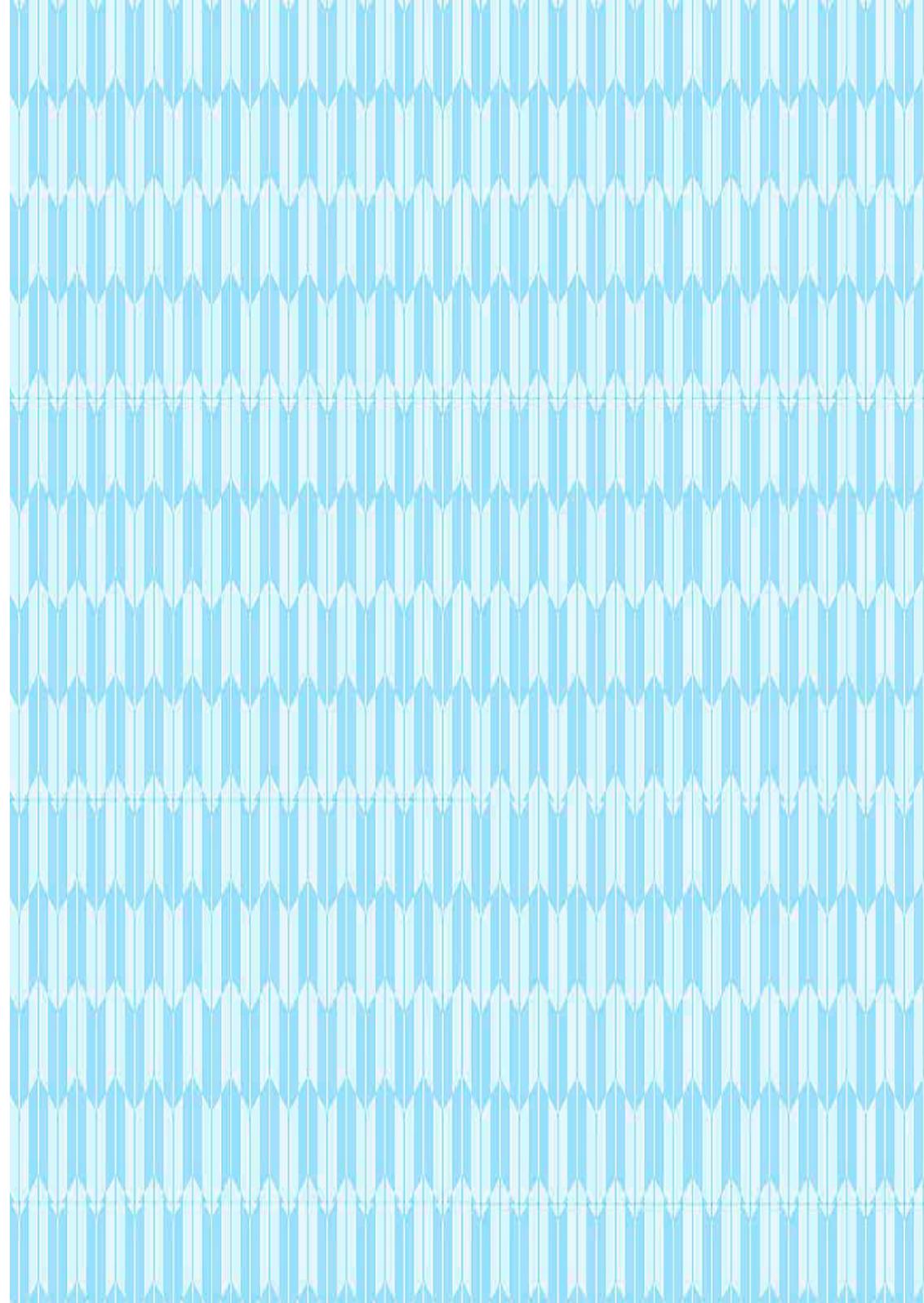
2021



山巡り 須賀忠男



石鎚山・天狗岳 1982m
愛媛・高知の県境にある
西日本最高峰で
山岳信仰の霊山である
四国八十八ヶ所知られる
空海も修行したとか！



十一月集

すこし

佐藤 竹僊

父のカネ母のクヂラと釣忍

下り立てばアンナプルナの峠茶屋

金木犀すこしはなれて銀木犀

金木犀數本銀木犀はいっぱん

金木犀灯よりはなれて銀木犀

金木犀のほひの中に銀木犀

銀木犀木立に紛る花をはり

ゆく秋を眼前にして動かざる



立山アルペンルート・黒部峡

七郎衛門吉保

黒四を上り下りして探す秋

黒部の秋一皿にありダムカレー

立山や紅葉と硫黄地獄谷

秋夕焼富山の雲海染めにけり

称名滝百丈の壁薄紅葉

百尋の溪間に浮游赤蜻蛉

蟋蟀と亀虫が主秘湯宿

一汁の茸「くずれ」に感嘆詞

浜離宮

篠田純子

霧の水上バス「ラ^{フラット}」の汽笛

九年母たわわ象住みし跡平ら

小暗きに藪茗荷の実艶光る

烏瓜揺るる掘割り水暗し

三百年の松の支柱や秋あかね



終演

篠田大佳

喃語して稚児は花火に魅せらるる
残る暑さ善意で買ひしチョコ溶ける
涼新たハーゲンダッツに霜の付く
かけつこに揺るる桔梗や暮れなづむ
終演のやさしい耳鳴り夜の秋



澄む秋

須賀敏子

澄む秋や予定なき日のまだ続く
秋空へ競ふばかりにビルの建つ
墓地にゐる二匹の猫や秋真昼
分け入れば赤と白との水引草
約束の様に我家の彼岸花
散り急ぐゴーヤの花の黄色かな
くるくると坊ちゃん南瓜もてあそぶ
コロナ禍も峠を越して九月尽



富士初冠雪

田中藤穂

紫式部の小さな花をのぞきこむ
記念めき一本咲きし曼殊沙華
句友病む快癒祈りて深む秋
仲間一人逝きたる今日や酔芙蓉
富士山は初冠雪といふニユース



菊

長崎桂子

七十五発村の希望の花火
蟬の殻歩道にふたつ儂さを
金銀の結果に泪八月尽
思ひ切り手を洗ふ昼秋暑し
清かな待合室や菊大輪
目を瞑り一杯に吸ふ菊日和
大小をこんもり植ゑし菊の鉢
サーマルリサイクルの討論花木槿



○

森なほ子

羽ばたいて初鴨水に立ち上がる
むくつけき園丁に揺れ秋の薔薇
夜半に鳴くやクラシックハウス白鹿像
吾亦紅宇宙空間かと思う
異国語の不思議な文字や小鳥来る
夜歩きの人を囃して青松虫
秋風のくまなく巡るビル谷間

室堂

赤座典子

室堂の万年雪の切れ深し
透過光ルビーと化するナナカマド
チングルマ綿毛となりて煌めける
黄の凄む背高泡立草の密
秋澄めり半日消えぬレンズ雲
地藏堂の屋根に積石秋高し
秋の蚊を払ひながらの露天風呂
新月や昴・土星の観測会



フィンランド恋し 秋川 泉

月代や二そうの舟をこぎ出しぬ
霧深き湖面漕ぎ出す異郷の地
茸狩分け入る森に丸太小屋
深き森そここあそこ茸狩
猫を抱き茸に埋もれる少女かな
山盛りの茸の料理パンを焼く
フィンランド絵本の中の毒茸
精霊のサウナや白樺の香り



九月号作品より

篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

ドイツの水フランスの水葛餅買ふ

佐藤竹僊

ドイツとフランスと日本が同じ棚に並んでいます。コンビニエンスストアの風景でしょうか。コンビニと言っても住宅地、オフィス街、観光地など、場所によって棚の風景も変わります。葛餅を買うとなると住宅地が思いつきますが、どの場面でも、ふるさとの味への想いは核として残ります。(大佳)

暮夜といふ野暮なひびきや木枯忌

佐藤竹僊

懐かしい七座(ほくと)句会を、思い出しました。先生が、木枯さんに熱燗を勧めています。恭子さんの手作りのお料理が、テーブルに溢れんばかりに並んでいます。木枯さんの句は、上五、中七の後に「暮の秋」の季語です。これはとても点が入ります。「木枯さん、そろそろ暮の秋はやめませんか」と、先生が進言しますが、木枯さんは笑うばかりです。(純子)

荒梅雨や眠れぬ夜を猫と居る

秋川 泉

大雨で、洪水や土砂災害などの不安の中、猫を近くに抱えて夜を過ごしているようです。薄明かりの下、大雨の情報を固唾を飲んで見守る作者が見えてきます。作者だけでなく、猫の心臓の鼓動

が聞こえてきそうです。(大佳)

巫女の所作見て潜りたる茅の輪かな

大日向幸江

夏越の祓の景です。巫女さんが本殿で祈禱をしていたのでしょうか。滅多に見られない景色に作者は視線を奪われています。鑑賞者にとっては、巫女さんの所作にクローズアップするところが新鮮に映ります。(大佳)

童心にかへる旅路のハンモック

七郎衛門吉保

旅の宿での一幕。楽しくなって何度もハンモックに乗る作者の様子がうかがえます。旅の疲れも忘れて、元気にはしゃぐ様子は、旅の雰囲気にはびつたりです。(大佳)

銀座吉兆解体開始梅雨最中

篠田純子

休業や閉業のお知らせが、色々なお店に掲げられて久しくなりました。経営者たちの怨嗟の声も様々聞かれますが、銀座の料亭も閉店の波に吞まれてしまったようです。しかし、解体の風景は悲しいながらも実に淡々としていて、東京の盛衰を間近に見る思いです。(大佳)

冷やし酒の瓶廻しけり七座句会

篠田純子

「九月号鑑賞」の拙句「木枯忌」について純子さんが書かれた。私が忘れてゐることをよく覚え

てをられる。大胆なことをいったものだ。著名俳人も亡くなされると時の流れの中に埋没してしまふ。「あをキーワード俳句辞典」も「あを」に縁のあった人の追想のよすがにといふ一面もある。純子さんも恭子句をときをり採り上げてくれる。「あを」は山莊慶子さん、佐藤恭子さんの追悼号を出しそびれた。いまは無理してはじめをつけないのも私らしいかなとおもつてゐる。この句の中にいろいろな人の顔が浮かんできた。皆にここにこしてゐる。

シエスタや架空列車の揺れやさし

篠田大佳

ハンモックに寛ぐ作者を、想像しました。やさしい揺れに仮想の旅を楽しんでいます。旅先はヨーロッパでしょうか、北海道でしょうか。頑丈なハンモックは、時折「ギイリ」ときしみます。(純子)

空想の旅のはじめの曹達水

篠田大佳

私の歳で曹達水とくれば「回想の旅のはじめは曹達水」となるが、春秋に富む人が作ると掲句のやうになるのか。若い時はじじむさいものに魅かれることがあった。大佳君の「曹達水」もそんな心持なのだらうか。

無観客それでも五輪蟬時雨

須賀敏子

鑑賞の執筆時にはオリンピックの日程は終了しましたが、言論の世界を垣間見ても、オリンピックに限らず、会話が成立しないために意見の合意ができず、一方通行の意見の応酬をしなければな

らない不思議な言語空間が日常化してきました。言論空間に響く雑音を蟬時雨とイメージを重ねることによって、雑音もまた風流に感じようという作者の遊び心を読みます。(大佳)

いつしかに花消えてぬし美女柳

田中藤穂

美女柳の開花時期は六月から七月くらいだそうです。梅雨でしばらく外から意識が逸れたうちに、美女柳の花が枯れてしまったのでしょうか。「美女」の名が、花が消えたことのミステリアスさを想起させます。(大佳)

塀の隙間を行来する蜂二匹

長崎桂子

働き蜂が蜜を取りに来ているのでしょうか。わざわざ狭い塀を越えて来るのですから、蜂たちにとってよほどの魅力があるのでしょうか。詠まれている蜂が「二匹」というところが想像を刺激して、会話や愚痴が交わされているようで、労働者の悲喜こもごもを感じます。(大佳)

木も草も何か云ひたげ喜雨の中

森なほ子

作者に植物の声が超感覚的な部分で伝わったという感覚が俳句に再現されます。我々には超感覚的に感じているだけでも、植物には植物の周波帯での言語があり、会話や絶叫があるのかもしれない。喜雨より植物の喜ぶ声が誘導されています。(大佳)

大夕焼峰二つある坂戸山

赤座典子

坂戸山の標高は六三四メートル。東京スカイツリーと同じ高さで、市民が親しみを持っている山という観光ガイドの記述があります。掲句は旅の宿での一コマでしょうか。ぼんやりとした山のイメージから観察を深めて、峰を二つ見つけた作者です。観察の深みは、旅の楽しさと気力の充実を前提としていて、掲句は作者の旅の成功を約束してくれます。(大佳)

表札も個人情報

秋川 泉

美しい素晴らしい書体の表札を稀に見る。それは家の主の人格を表しているように思われ、私は憧れる。しかし、現代は表札を出さない、名前を尋ねることも憚られると云う時代になった。さまざま考えたも及ばない犯罪が増えた為か。個人情報保護法で、全ての情報が外に出る事を守るためか。それなのに国家は、個人をより深く知りたがっている。

(前号正誤)

表札

焔収集

海と空同じ大きさ浮袋 佐藤 竹僊
 色鳥の声降りそそぐ駅の道 大日向幸江
 熟寝子の汗しつとりとお食ひ初め 七郎衛門吉保
 実山椒衣を剥いで嬰兒の瞳 篠田 純子
 落蟬や三階五階外階段 篠田 純子
 式部の実きみどり緑今朝の秋
 少年は傘もて雨を濡れにけり 篠田 大佳
 ぐずぐずに朝顔伸びて花数多 須賀 敏子
 テレワーク終はりゆっくり梨を剥く
 敗戦前夜一睡もせず明けしこと 田中 藤穂
 茂りゆたかなりし厄介と不気味 長崎 桂子
 落ちたるは蕾のやうに花木権 森 なほ子



BGMは「茶色の小瓶」芋洗ふ 赤座 典子
 伸びる穂にあつまる光荻の原 秋川 泉
 慣れ親しカフェを包む蟬時雨 大日向幸江
 戦没の妻の父への菊の花 七郎衛門吉保
 ハイウエーのしづかな晝や涼新た 篠田 大佳
 本を読み布と遊んで八月尽 須賀 敏子
 家系図のどこに吾居る蟬時雨 田中藤穂
 西の山頭覗けるやっとな秋 長崎 桂子
 みんなや子らの帰れば森閑と 森 なほ子
 新涼の風心地良き蹠かな 赤座 典子
 秋と識り風に吹かれる夕散歩 秋川 泉

喜孝抄





十月号

佐藤喜孝

大日向幸江

オーイと呼ぶ声響きたり夕涼み
木の実落ち風の行方を確かめし
慣れ親しカフェを包む蝉時雨

○「オーイと呼ぶ」で視界の開けた広い空間を中七までにおもふ。しかし「夕涼み」で私の空想が途切れる。作者の世界に至らぬもどかしさを覚える。

○この句も前句と似たもどかしさを覚えた。

花や木の葉が散り、風の行方を確かめるといふことではわかりやすい。風の影響を受けにくい木の実は落下から風の行方を確かめるのは作者の世界である。

○いつも行くカフェ。落ち着きやすらぐことのできるどころ。蝉時雨にそして緑に囲まれるカフェ。「包む」が蝉声、緑の豊かさをおもはせる。

七郎衛門吉保

農・工・商伝統うたふ夏球児
予報図に赤の線状秋甚雨
戦没の妻の父への菊の花

○「全国高等学校野球選手権大会」が夏の甲子園の正式名。句意に添ひ今夏の出場校の中に探してみ。「帯広農業高校（一九二〇年開校）・倉敷商業高校（一九一二年開校）・熊本工業高校（一八九八年開校）」と伝統ある高校と判った。高らかに唱ふ校歌の歌詞に良き伝統が詠はれてゐることであらう。前にも書いたとおもふが、春夏秋冬に名詞を直付けするのは注意が要る。私は「夏の球児」としたいが。個人の言語感覚に負ふ所である。

○語彙は俳句の絵の具。「甚雨」は私は見慣れない言葉だが古から文献に見える。「秋甚雨」は違和感がない。テレビかパソコンの天気図を見ての作品。作者の俳句素材の多面的なことに驚く。

○岳父への献花。もしかしたら岳父にお会ひしてない可能性もあるが、心を込めての俳句をもって捧げる献花である。

篠田大佳

野良猫は甘え三味線響く夏
八月や玩具の兵がみなごろし
ハイウエーのしづかな晝や涼新た

○野良猫も人間嫌ひと人懐っこいのと居る。もしかしたら猫の方で人定めをしてゐるのかも。この句、野外で三味線の稽古をしてゐるのかも。その三味線の音に合はせてニャーといふ鳴き声を和してゐる景か。「夏」が無理してゐる。

○第二次大戦の開戦月と敗戦月は心に残るのかよく詠まれる。特にある年代から上の世代は八月と云へば長い戦争とその後のことが走馬灯のやうに廻る。「八月」といふ季語は私も使ったが、難しい季語だとこのごろおもふ。

○涼を求めてドライブをしてゐるのか。いつも混んでゐるハイウエーのイメージがあるのだが、いまはだうしたことが「しづか」であることに気がつく。クーラーを切つて窓を開けドライブをたのまれたのだらう。

須賀敏子

コロナ禍のオリンピックや八月尽
本を読み布と遊んで八月尽
映画好き見に行けぬまま八月尽

○初めての東京オリンピックの時は俳句の先達に連れられて蓼科に遊んで居た。世の中をはずに眺めるのが格好良いとおもつてゐた一団。今夏のオリンピックはコロナのお蔭でゆつくりとテレビ観戦させてもらった。敏子さんの思ひを込めた仕立て方だが少々淡泊すぎると感じた。

○好きな本を読み、好きな手芸をして暑い八月を過ごした。前句は少々淡泊すぎたと思つたが、この句は淡々として滋味があつた。

○三句とも根底に「俳句は日記」といふ考へがある。瀧春一先生もそのやうなことを述べてをられたと記憶してゐる。

田中藤穂

オリンピック終り台風くる予報
台風の小雨の中を外出と
家系図のどこに吾居る蝉時雨

○藤穂さんも広く云へば敏子さんと同じく日記のやうに俳句を作られてをられる。

○颱風圏に入ってもいつも雨風が激しい訳ではない。うつすら陽が差したり小雨がさつと降ってきたり。台風さ中の小雨はどこか明るくいつもの雨とは違ひ別な趣がある。

○家計図のある家庭と、我家のやうにそれらしきものが全くない家庭では、育ち方が違ふかもしれない。家計図の中に自分の位置を定める。この意識があるのとないのでは人格形成に差が生じる。家系図には蝉の声で埋まった庭が似合ふ。

長崎桂子

庭の百合激し揺る風雨来るらし

八月や降水被害とコロナ禍

西の山頭覗けるやつと秋

○憶ひを五七五に収めんとすると上手く行かぬときがある。無理をして五七五にしても伝はりにくいのは何にもならない。が意味に重きを置き調べを壊したのでは詩としての俳句が成り立たない。そんな時数日描いてみるのもよい。出口が見つかる時もある。「庭の百合激しく揺るる雨来るらし」。

○今年の八月を桂子さんは振り返る。天候異変とコロナウイルスに驚き氣遣はれた。「コロナ禍」

を普通に読むと四音なのでここは「まが」と読んでみた。

○「やつと秋」に酷暑の夏が思はれる。空気が澄んできて遠くの山も姿を現した。四日市の西方には鈴鹿山脈がはしる。

森なほ子

みんなみや子らの帰れば森閑と

気も草も何か云ひたげ喜雨の中

向日葵はスローな花火空に咲く

○おもしろい。子供らの遊ぶ声。その子供らが帰って行ったら辺りが森閑とした。といふ句意ではない。子供らが遊んでるやうと帰ってしまったてもそれに閑はりなくみんなみんな蝉は鳴いてゐる。その蝉時雨を「森閑」と詠まれた。

○千天の慈雨。木や草もよく見てみると確かに言葉に出来ない言葉で会話してゐるやうにおもへる。喜雨の中での植物たちの会話に耳を傾け、目を凝らす。愉しみの一つ。それを俳句に表現できればなほ嬉しい。

○向日葵は丈のあるものは頭上で花をさかせてゐる。草丈2〜3メートルと聞く。この向日葵の花

を花火に譬へて詠まれた。実際の花火は瞬きの間に昇り開き散華する。これに比し向日葵はゆっくりと開くと。草の中で一番丈のあるのはなんだらう。皇帝ダリアは8〜10メートルといふ。

赤座典子

新涼の風心地良き蹠かな
雨上り鶉色光る椿の実
毬近し街道沿ひの栗林

○典子さんは素足になり敏感になった足の裏に風の涼しさを覚えた。蹠の触覚が捉へた一句。芭蕉に「ひやひやと壁をふまえて昼寝哉」といふ句がある。掲句とどこか氣息があふやうに読んだ。

○繊細な観察である。雨あがりの椿の実、ニスを掛けたやうにてらてらと光つてゐる。実の色も緑から鶉色に変化して心惹かれ詠まれた。

○農地を節税のために栗林にしてゐると聞いたやうな気がするが定かではない。ここでの「街道」が不確かで鑑賞の妨げになった。栗の毬が道にせり出さんばかりに通行人に接近してゐる。歩いてゐるをりの景と読んだ。

秋川 泉

閉店の美容院そと大夕立
秋と識り風に吹かれる夕散歩
荒川の空いっばいに秋の風

○この「そと」は「そと」か「外」かで迷った。で美容院が知らぬ間に閉店してしまったの「そと」と受け止めた。泉さんの心情を表す「大夕立」が降つてゐる。

○知と識では意味が全く同じとは思へない。今日は立秋と暦かニュース識つたのかもしれない知識として秋を識つた。そして夕方の散歩で頬に受けた風にしみじみを秋が来たのを知った。回りくどい鑑賞になった。

○荒川の土手からの眺望か。三百六十度広がる空、想像しただけで爽快感満喫





佐藤喜孝

七郎衛門吉保

秋声や「小さい秋」も「秋桜」も
九月尽 解除 解任 解散と
電池切れアフガン 撤退 秋寒し

○「秋声」は【物音がさやかに聞こえること。風やせせらぎなど自然の音ともかぎらず、人のたてる物音ともかぎらない。具体的な音ばかりでなく、心の中に響いて来る秋の気配もまた、秋の声である。】とある。「小さい秋」も「秋桜」も「秋声」だと吉保さんは詠んだ。「小さい秋」はサトウハチロー作詞の「ちいさい秋みつけた」のことか、又「秋桜」はさだまさし作詞の「秋桜」か。
○解除解任解散と解を三つ重ね連ねた。忙しい九月をリズムが知らせてくれる。
○作品は事象に振り回されつつ、その奥にある真実を掴み提出するといふもう一つの働きもある。「電池切れ」「秋寒し」にその働きを期待した。

篠田大佳

鼠の喰ふ毒はももいろ秋徼雨
桂男 遠き異星の 抵挡権
獣肉を卓に並べよ月今宵

○珍しい鼠をとりあげた句がもう一句。様々な色の殺鼠剤が市販されてゐる。中でもももいろの殺鼠剤は間違へて口に入れるとは思へない嫌な桃色だった。

○桂男は【月に住むという伝説上の男。また、月の異称】。この句の「異星」月以外の星のことか、または月を指すのか。「桂男」とあるので前者であらう。今見終わったテレビドラマの中で【人生は蠟燭のやうなもの、自分で点火できないし消化もできない。生きている間まはりを明るくする】大意はこんなセリフがあった。人権侵害をする為政者、地球の土地所有に飽き足らず月や火星にも利権をと虎視眈々と狙ふ為政者。これらの人には当てはまらない科白であった。

○この句を読むと「花より団子」など可愛らしく「花に団子」といひ替へてしまふ。さしずめこの句「月よりステーキ」といふところ。軽口っぽく読んでゐるがステーキ・すき焼きなどといはず猛々しく「獣肉」と。命令形で詠みおもしろく読んだ。

黒澤佳子

鉢ごと買ふ季節はずれの薔薇や薔薇
烏賊の皮むぎと剥きけり身に切れ目
蠅螂は伸し烏賊のごと靴の底

○花屋で薔薇を求めるときは大方切り花だが、鉢ごと買ったことに佳子さんはよろこびを感じてゐる。季節はずれで花もすぐ終わってしまふかもしれないが、切り花と違ひ育てて亦た花を咲かせるといふ楽しみも鉢植えにはある。歛びを表すに思はず薔薇をリフレインしてしまった。

○レシビ俳句である。まだ烏賊を扱ったことがないので薄皮を剥くのが大変だといふこと位しかわからない。身に切れ目を入れて皮を剥ぐといふことか、剥いた後刺身にしたのか。句会だと疑問はすぐ解決するのだが。

○蠅螂を避けやうとおもつたがはずみで踏んでしまった。蠅螂も寒さで動きが鈍かったのかもしれない。足を上げてみると靴の底には……。作者の驚きを物に即して作られた。

須賀敏子

大好きと孫の手紙や敬老日
子規の忌や夫は八十一歳に
二人居て言葉少なや藪茗荷

○孫の句は難しい、避けた方がよいとは耳に胼胝が出来るほど聞いてきたがやはりうれしさのあまり一句作りたくなるのが心情。

○子規忌は九月十九日。糸瓜忌、獺祭忌とも。夫君も同じ日の生まれなのかも。「子規の忌の夫は八十一歳に」「獺祭忌夫は八十一歳に」と「や」を避けてもよい。

○「ストープの音だけ聞いて二人かな」「二人きり無口になれば鉦叩き」と同じやうなテーマで攻めてゐる。わるいことではない。掲句の中七のや切れも藪茗荷も所を得てゐる。

田中藤穂

娘の夫婦訪ひくる今日は敬老日
お土産に鮎・菓子・葡萄敬老日
眼も耳も齒もおとろへぬ敬老日

○三句とも「敬老日」の句である。はじめは「老人の日」といつていたのでは、何時の間やら「敬老の日」といふ国民の祝日になった。祝ふ立場の時も反対になった今でも好きになれない祝日だ。

藤穂さんは敬老の日のひと日を赴くままに五七五に詠んだ。娘夫婦が訪れた。訪れた日がたまたま敬老の日だったのか、さうではなく敬老の日だから、などと藤穂さんはひねくれた詠み方はしない。素直に浮き立つ心で待つてゐる。

○娘である。母の好物は心得てゐる。楽しい語らひとともに美味しくいただいたことであらう。

○人間等しく歳をとる。せんないことである。おとろへに抗する派と、あきらめる派とゐる。私は後者の方、流れに任せてゐる。

今年の敬老に日は秋晴れであつた。

長崎 桂子

心地よき西の風吹く赤とんぼ

西の嶺秋涼の雲のたなびく

震源は能登半島や九月の夕

○四日市の赤とんぼが飛ぶ季節の西風はどの様な風なのだらう。心地好き句中の風に私も身を任せ

てみた。

○風が吹いてくる西方には嶺が見える。見なれてゐても季節ごとの佇まぬは又格別。少し散文化してゐるので「西の嶺秋涼の雲たなびけり」としてみた。

○何年か前能登半島に大きな地震があつた。今も又地震が、震源地は能登とテレビが云つてゐる。桂子さんは能登になにかの思ひがありこの句が出来た。

森 なほ子

右手に吾子左手にスマホ秋暑し

似て非なる外国の文字秋の海

朝顔の咲いてこの夏より空き家

○いつの世も子育てが簡単な時代はなかつた。炊事洗濯も手抜きをしても済む時代になった。なのに今の世も子育ては忙しい、とちよつと皮肉つてゐるやうだ。

○日本の文字と外国の文字が似て非なるとはどんな文字か考へたが分らなかつた。「外国」だけでは茫洋としてゐる。どこの国の文字であらうか。

○住人が居ぬ家の庭に花が咲いているのは足が止まる。朝顔を種から蒔いたか、苗を植ゑたかして

花の咲くのを楽しみにしてゐたが引つ越しをせねばならない事態になつたのだらう。なほ子さんは住んでをられた人をご存じだったかもしれない。

赤座典子

黒部峡断崖絶壁薄紅葉
盛大な放水小さき秋の虹
秋光裡遊覧船の小半時

○私は俳句を作る上で楽しみの一つに旅吟がある。先人たちは俳句を作る目的で旅に出かけた。この句、漢字だけでごつごつと作られてゐる。それがまた「断崖絶壁」に呼应して効果を上げ成功してゐる。

○ダムの放水、消火の放水と「盛大な放水」はさまざまにおもひ描ける。典子さんはそのことはともかくとして盛大な放水が生み出した虹のあまりに小さくそのアンバランスに興味を抱いた。この場に百人の俳人がいてもこの様な見方は希少かもしれない。

○小半時では乗つたらすぐ下りるやうなもの。それでも秋の日のあまねく照り渡る中での遊覧船上。詠はずにはいられなかつた。

秋川 泉

居眠りをしつつ栗むく夜半かな
栗あふれころぶ鼠は大慌て
秋彼岸尋ぬる寺は無入なり

○栗を剥く作業は脇で見ただけでも根気の要る作業と分る。刃先に注意を向けてゐる内に、包丁の峰でいつの間にか手を痛めてしまふ。心して頂かなければとおもふ。さて栗剥に敬意を表し句に戻る。大量に手元にある栗、明日は家人に食べてもらいたいと皮を剥くがときどきうとうとしてしまふ。夜半は「やはん」または「よは」と読む。私は「やはん」の硬さより「よは」のやさしさがこの句に合ふとおもふ。

○タイムスリップをしたやうな雰囲気。私も木造の家に住んで居た時は鼠捕のお世話になつた。石鹼をよく齧つたので鼠捕の餌に付けてみたが敵もさるもの、不発に終わった。泉さんの家の鼠はかはいらしい。山積みの栗が崩れたのであらうか。現実の鼠は嫌だがかう句にしてみ読むとほほゑましい。

○秋の彼岸の墓参り。知り人の墓はあるが住職がゐない寺。物語の序章のやうな句だ。

ペット



かはたれ時

篠田大佳

集合住宅住まいの我が家は、ペットを飼うとなれば水生動物が常でした。小学生の頃、一緒に暮らしていた金魚が、ある朝水槽から飛び出して、机上に跳ねていました。それを放置していたら、他の家族が気づいて水槽に金魚を戻しました。その時の話が俳句になっています。

かはたれ時もんどり打つて跳ぶ金魚 篠田純子

虎鉄

秋川 泉

田舎の山寺には、山羊・鶏・矮鶏・兎がいた。そして柴犬を代々今も飼っている。私は結婚して娘が小学生の時、岐阜県福地からグレー色でブルーの眼をした生後二ヶ月の雄の猫を買い十八年七ヶ月共に暮らした。誰もが思うように私は、「虎鉄は猫にしておくには惜しい。器量と云い頭脳と云い我家の長男にしたい位。これ以上の猫はいないね」と云って暮らした。そして今は、何んと云ってもグリーンイグアナ。漫画家の西原理恵子さん宅のイグアナをテレビで観て、私の目はハートになった。何んてかわい!!しかし夫が「頼むからそれだけは止めて……」と云うので私はグリーンイグアナを飼う事を夢想し続けている。きっと私と相性ピッタリなはず。私のイグアナ愛は止まらない。

下石神井日録 2

佐藤喜孝

世に親子丼と言ふ食へ物がある。親子で食へる丼なら微笑ましい。親子を食へる丼では箸が躊躇する。どこの国が海老を生きたまま熱湯に入れるのは禁止にするといふ法律を作るとか云つてゐるらしい。鯨を食べるのはかわいさつとか騒がしい。個々でおもふのは勝手だがそれを人に押し付けるのはいかかとおもふ問題。話が脱線した。冷蔵庫を覗いたら長芋とむかごが目に入った。むかご飯にとろろをかけたら零余子親子丼かなとおかしくなり試してみた。不味かった。とろろの中に搾り残した長芋をそのまま食べた。これは結構いける。揃った長芋に適度な歯ごたえを与え自分では成功した。

シルバーパスの書き換をまだしていない。コロナ騒動以降バスや電車に乗ってゐない。行くところがないといふこともある。用足しはママチャリ。これで中野と下石神井間を何回か行き来した。もうこの道も最後

かなといふ時、息子と自転車で走つてゐた。お昼を過ぎたので目についた焼鳥屋に入った。開け放った店内から秋日和の道を行き交ふ人が見える。この店は踏切の脇にあるのでカンカンカンといふ警告音とともに人々や車が慌ただしく踏切を渡り去る。そんな昼下りの閑かな町騒の中で極上のレバ焼と生ビールを久しぶりに楽しんだ。帰り道花屋でコキアを一鉢求めた。

下石神井にきてまず探したのは図書館。隣の区の杉並区柿の木図書館が地図で探すと一番近い。踏切を越え石段を上ったところに図書館はある。踏切は狭く人と自転車しか通れない。少し危ないので今は練馬区の南田中図書館を利用させてもらっている。どちらの図書館も近くまで仕事でよく来てゐたところで不思議な気分。

図書館の近くに曼荼羅寺がある。この寺の帰りに寄る蕎麦屋がある。そのときは遠くまで来たとおもひ一軒だけある蕎麦屋に妻と入り妻はビール、私は麦焼酎を蕎麦湯で割つてゐたことを懐かしく思ひ出した。

防潮

防潮堤ばかり六年春愁ふ

七郎衛門吉保

ほうとう

ほうとう秋父の語りし山津波

堀内 一郎

報道

報道の家族から遺族へ菊の秋
台風報道御当地演歌縁取りぬ

赤座 典子
赤座 典子

暴動

チベットに暴動のあり春嵐

吉成美代子

放尿

雪の底生きるあかしの放尿す
橋桁に犬の放尿梅雨兆し

佐藤 喜孝
佐藤 恭子

放任

葡萄熟る自由放任低農薬

森 理和

方便

傀儡の糸引く方便小鳥来る
鰯雲日々の方便の外まはり
さりげなく方便使ひ冬仕度

篠田 純子
篠田 純子
森 理和

葬る

信濃川に父と葬る猫の「ねこ」
友葬りがうがうと枯れつくしたり

佐藤 恭子
渡邊 友七

訪問

さるすべり訪問販売寄らず過ぐ

竹内 弘子

担任の家庭訪問五月かな

山莊 慶子

法要

新緑や御遠忌法要雨しとど
法要の読経止みて墓の恋
法要の読経にわたる秋の風

芝宮須磨子
渡邊 友七
早崎 泰江

抱擁

抱擁のラストシーンに落葉舞ふ

栢森 定男

蓬萊

蓬萊や通ひつめたる鼠かな
椿象を大きく育て蓬萊山
蓬萊山の掛軸とする年用意

佐藤 恭子
佐藤 喜孝
赤座 典子

抱卵

秋の雨雉鳩抱卵しつづける
木の上に鷺の吹かるる抱卵期

森 理和
竹内 弘子

法律

落葉焚出来ぬ法律落葉掃く
空とべば空の法律遅ざくら

長崎 桂子
篠田 大佳

法隆寺

法隆寺堂内に坐し秋の声
鐘の音を二回も秋の法隆寺

田中 藤穂
佐藤 喜孝

放浪

放浪癖帰巢本能めだかの子

篠田 純子

吠える

遠吠え村雪降り積めば泣き止まむ

堀内 一郎

狺犬の吠えて間もなく銃二発

須賀 敏子

灰色に跳ね上げ吠える春嵐

長崎 桂子

母恋の遠吠つづく冬銀河

森 理和

龍舌蘭の花と炎帝吠えあへり

篠田 純子

通るたび吠える犬あて顔の花

須賀 敏子

風鐸と吠えあつてゐる春疾風

篠田 純子

サイレンに遠吠響く冬の夜

長崎 桂子

吠ゆ犬の止処なく吠ゆ秋の暮

森 理和

吠える犬唸る犬をり今朝の冬

長崎 桂子

頬

笛吹川頬につきさす寒の風

芝宮須磨子

春近し和らぐ風に頬さらし

河合 笑子

湯上りの頬に乳液春の雨

田中 藤穂

頬杖を解き春一番と云ふべかり

後藤 志づ

紫陽花や観音様の頬染めて

須賀 敏子

頬染めし林檎に優し小糠雨

松本 米子

様変る新宿に來し頬の冷え

芝宮須磨子

頬赤く染めて困炉裏の楳返す

栢森 定男

頬杖を杖も突かずに寒の入

堀内 一郎

雪残る道行く頬のしつとりと

赤座 典子

ポストまで朝寒頬に張りつきて

田中 藤穂

翳つくる高き頬骨余寒かな

赤座 典子

ブルーベリー頬張るガイド瞳の碧し

赤座 典子

頬杖の羅漢に冬日届きけり

鎌倉喜久恵

髪撫でて頬撫でてゆく春の風

森山のりこ

立冬の頬にひんやり化粧水

木村茂登子

初雪や少女駈け出す頬の珠

佐藤 恭子

恋雀トタンの屋根に頬黒し

定梶じょう

目つむりて頬撫でてみる猫柳

赤座 典子

ひやひやと頬に寄りくる桜東風

芝 尚子

草の餅頬張つてゐるひとりかな

芝 尚子

牛矮鶏に頬寄す零歳初彙くぼ

森 理和

句作りも倦むしばし頬杖目借時

鈴木多枝子

花大根一輪車の子の赤き頬

遠藤 実

秋雨や頬杖つきて何もせず

早崎 泰江

頬ゆたに弥陀笑みたまふ菊の前

渡邊 友七

老いどちが頬桃色に明けの春

芝宮須磨子

停留所子が頬かむりしてもらひ

定梶じょう

頬笑んでみれば安心梅雨鴉

竹内 弘子

白梅に頬打つ風の痛きかな

鈴木多枝子

野仏の頬を染めたる山桜

鈴木多枝子

夏寒しだし巻玉子頬張りぬ

赤座 典子

ピンと張る冷たさに頬差出せり

赤座 典子

頬杖の江戸の石仏落椿

須賀 敏子

四十雀白き頬透く石榴の間

赤座 典子

あとがき

短文のお題「好きなこの道」

生れて八十年中野区に住んで居た。好きな道といへば宝仙寺まで行く少しの間。左が墓域で、昔は有刺鉄線で囲まれてゐた。その有刺鉄線の破れをくぐって鳥糞竿をもった子供の私が蝉や玉虫を捕まえた。なぜか寺男に見つかると逃げなければいけない。元の有刺鉄線まで逃げるのだが捕まった子供はいたのだらうか。右側は赤レンガの塀。雪が降るとことのほかよい。今は有刺鉄線はブロック塀に変わり、レンガ塀は金網の柵になってゐる。

高島茂は「ぼるが」がをはると俳人を誘ったり、時には一人で中野坂上のスナックに行く。そこから電話をよこす。布団に入ってもいそいそと着替える。茂も私もいつも同じ歌を歌つてゐた。帰りは高円寺の高島家まで歩いて送る。墓地脇の道によく墓が出てゐる。暗いのに茂は目ざとく見つけ墓のやうな掌でつかんでブロック塀の向かう側へ放り投げる。茂の奥様は

東山千恵子そっくりの穏やかな顔で起きて待つてゐる。帰ったのを確認すると自室へ。ときには高島家の風呂場でシャワーを浴び一杯飲んで帰宅。茂さんと一緒なら妻は何もいはない。後年この道を逆に八田木枯さんと歩いた。茂さんも木枯さんともこの道でいっぱい話をした。この道が好きといふより、こんな思ひ出を作つてくれたから好きなのだらう。(喜孝)

二〇二一年十一月号

発行日 十二月四日
発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2 一階
電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝
会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402
佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)